
迷子の現実

百（難しい童話）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子の現実

【Nコード】

N7889Z

【作者名】

百（難しい童話）

【あらすじ】

現実が迷子になった。それで僕は、現実を探し出す為に、外に出かけたのだけど、現実が迷子になったまま外に出た所為か、外の様子は奇妙に変わっていたのだった。

自サイトよりの転載です

「……で、君が探している、迷子になったその現実とやらは、いったい、どんな姿をしているんだい？」

そう聞かれたのは、迷子になった現実を見つける為に、押し入れの中を探して、冷蔵庫の中を探して、ベッドの下を探して、天井裏を探して、ごみ箱の中を探して、パソコンの中を探して、それでもやっぱり見つからなかったものだから、とうとう家の外に探しにかけて、木の洞の近くで偶然に出会ったしろきつねに、現実の居場所を知らないかと尋ねたその時の事だった。そのしろきつねはなんだか利口そうで、もしかしたら、現実の居場所を知っているかと思っただ。少し考えてから、やっぱり無理があつたかと後悔したけど。

現実が迷子になったまま外に出た所為か、その時の外の世界の様子は、随分と奇妙なものになっていた。いつの間にかに見た事もない林が駅の前にできていて、そして、その林の中の古木の洞の前にそのしろきつねはいたのだった。

「どんなつて？」

僕がそう聞き返すと、しろきつねはおいおい、といった様子でこう言った。

「どんな姿かも分からないで、何かを探そうっていうの？ それはいくら何でも、滅茶苦茶なんじゃない？」

そう言われて確かにそうだ。と、思いもしたけれど、そもそもどんな現実か分からなくなったからこそ現実が迷子になったのだ。と、そう思い直して僕はしろきつねにそう言ってみた。するとしろきつねは、やれやれといった感じでこう返すのだった。

「それなら、今見ているこの現実が、君の探している現実でない証拠が何処にあるというのだい？ 君は現実の姿を忘れてしまったのだろう？ もしかしたら、君はとくに君の探している現実を見

つけているのかもしれないよ」

そう言われて、僕はその可能性について考えてみた。だけど、考えているうちにどんどん周囲の景色は変わっていった、しろきつねと洞のある古木以外は、ほとんど全て、鬱蒼と茂るジャングルのようになってしまった。でも、そんな景色になっても、駅はやっぱりそこに存在しているらしく、すっかり真っ暗になったと思ったそのタイミングで、物凄い音をたてて電車が後ろを通り過ぎて行った。その一瞬だけは、その景色に光が入る。暗いジャングルが照らされて、そこに潜む動物達の姿が見えた。怪しく奇妙な動物達。電車が通り過ぎて真っ暗になると、またその動物達は闇に紛れて見えなくなった。

「いや」と、そこでようやく僕は言う。

「やっぱり僕の現実とは、こんなものじゃないと思うんだ。少なくとも、こんなにワイルドではなかったと思う」

そう言ったところで、目の前を大きな鹿が通り過ぎた。とても優雅で美しかったけれど、ちょっとばかりその鹿は大き過ぎた。

「少なくとも、こんなにワイルドではなかったと思う」と、それを聞くとしろきつねはそう僕の言葉を繰り返した。馬鹿にされているのかと思っただけ、なんだか少しも腹は立たなかった。

「恐らく、君はそれを本心から言ったのだろ。でも、どうだろう？　もしかしたら君は、どんな現実を見せたって、“僕の現実とはこれとは違う”とそう主張するのじゃないか？　少し乾燥し過ぎていると言ったり、少し冷た過ぎると言ったり、少し熱すぎると言ったりさ」

そう言われて、僕は少しばかり考えてみた。確かにそう言うかもしれない。どんな現実を見せられても、僕はそれを自分の現実とは思わない。いや、思えないかもしれない。少し乾燥し過ぎている、少し冷た過ぎる、少し熱過ぎる、とそんな事を言うかも。そんな僕の様子を見ると、しろきつねは軽いため息をほっと漏らした。

それから「どうにもね」と、しろきつねは言う。

「もしかしたら、君の現実には迷子になんかなっていないのじゃないか？」

僕はそれを聞いて少し驚く。

「そんな事はないさ。だって、実際にいないのだから」

そして、そう抗議してみた。すると、しろきつねはこう言うのだ。
「迷子になっているのは、多分、現実じゃないのだよ。迷子になっているのは、君自身さ。だから現実が何処にもない。だから現実を実感できない。恐らくは、そんなところが答えじゃないか？」

そう言われても、僕にはどうしてもそうとは思えなかった。いや、単に思いたくなかっただけかもしれない。

「不満そうだね。そんなに不満に思うのなら、試しに自分の家にも戻ってみるといい。きっと君はそこにすら戻れないよ。だって君は本当は迷子なのだから」

そんな僕に、しろきつねはそう言葉を続けてきた。僕はその言葉に逆らえなかった。だってそれに逆らうのは、僕が迷子と認めてしまふようなものだったから。それで僕はそろそろと歩き出したんだ。自分の家くらい、簡単に戻れるさ、と思いながら。

だけど、いくら歩いても僕の家はどこにも見えなかった。線路だけは確かにあるのだけど、それ以外は全て分からない。未知の世界。鬱蒼としたジャングルを抜けると、徐々に水気がなくなっていく。さらさらに乾いた大地がまるで雪のように流れていく景色。それに触れると、手の水分やら脂分やらが奪われて、なんだか少し痛くなつた。

ここは少し乾燥し過ぎている。

そう思うと僕は道を変えた。少なくともそれは僕の現実には思えなかったからだ。不思議な事に道を変えても線路は相変わらずに近くにあつて、まるで僕を監視しているように思えた。電車が通る。まだその場所は、さらさらの砂だらけだったものだから、それで巻き起こった風の所為で、辺りに砂塵がばあっと舞った。白い世界が僕の視界を埋め尽くす。僕はその中を進んだ。とにかく、砂のない

場所まで行きたかったんだ。

しばらく行くといつの間にかに砂が消えている事に気が付いた。だけど、白いのはそのまんま。どうやらその白は雪で、そこは雪の中だった。夜の雪の寂しい場所。だけど、やっぱり線路だけは近くにあった。線路の上を電車が走る。光を引いて遠く遠く。

僕はなんとかその電車の行先を見てやろうと思ったのだけど、どうしてなのか、文字が読めず、行き先は全く分からない。気付くと雪が降り始めていた。僕はそれにえらく困った。何しろ冬服なんて着ちゃいないのだから。

ここは少し冷た過ぎる。

そう思うとまた僕は別の道を進んだ。とにかく、太陽だ。少しでも太陽の気配がある所にまで行こう。今は夜だから、恐らく東。朝を迎える東の方に太陽はある。僕は東を目指して歩き始めた。どんなに道を進んでも、相変わらずに線路はあつて、そしてそれは僕を監視していた。

しばらく進むと仄かに明るくなってきた。そして何だか緑色。光り輝くその場所には、緑の海が広がっていた。この緑の海の水がどんな水でどんなものなのか、僕には全く分からなかった。ミドリムシでも繁殖しているのだろうか？

そして、もちろんその場所にも線路はあつた。そればかりか駅もある。太陽はその場所を容赦なく照らし、僕は約束されたあの言葉を言ってみる。

ここは少し熱過ぎる。

緑の海もなんだか変だったけど、光輝く太陽も変だった。なんだか、これは太陽と呼ぶには相応しくない気がしたんだ。不意に僕は恐怖を感じた。いけない早く逃げなければ。それで僕は、その時にちょうど来た電車に乗る為に駅に入った。駅の改札口は、僕の定期券で入る事ができたから、きつと通勤途中のどこかの駅なのだろう。何とか電車に乗り込むと、僕は元のジャングルの中の駅に行こうとそう思った。何にせよ、あそこが僕の家が一番近いだろう事は確

かなんだ。それに、あそこにはしろきつねもいる。負けを認めるのは悔しいけど、あそこで彼の助けを乞おう。僕は迷子です。どうか家に帰して欲しいと。

ところが、無事、ジャングルの中の駅に着いて古木の洞の所に行っても、しろきつねは何処にもいないのだった。確かにそれはそうかもしれない。別にここが彼の住み処と聞いた訳でもないのだからもう何処かへ行ったのだろう。だけど、僕はここを離れるのも怖かった。僕は迷子になっている。下手に歩けば、迷って迷って戻れなくなる。

それで僕は古木の洞の中に入った。そこは真っ暗で狭くって安心できたから。その場所で丸くなりながら、僕は何処かにあるはずの僕の現実を想った。迷子になっているのは現実の方じゃなくて僕の方。なら、現実には僕を見つけてもらうしかないだろう。だけどそれが無理だと、僕にはよく分かっていた。現実は何処にもなくて何処にもある。今そこにある現実を現実と認められなくちゃ、僕は永遠に現実には出会えない、迷子のまま。現実迷子。迷子の現実。

それから僕は、ゆっくりと目を瞑った。もう現実なんかなくても良いかと思いながら。真っ暗に。ただ、真っ暗に。

（後書き）

作者自身はそれを好きなのだけど、読者には評価されそうもない。そういう作品が時々、ありますが、僕にとっては今回書いたタイプのものが、それに当たります（と少なくとも僕自身は思っている）。無性に書きたくなる時があるのだけど、きっと評価はされない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7889z/>

迷子の現実

2011年12月25日13時49分発行